新板
繪入

加古川本竹綱目

三之巻

へ13
1608
3

1608
3

通西文庫

加古川本州絵目

河市

我侯青後編
教訓絵本質

三の巻

目録

第一　天上天下唯我独尊とせし尼の幻
風雅でもなくさりとて立花茶会かな
芭蕉翁もあれば絵の怪あるて居れば霊
行者の祈祷もなれるる悪本壺ゞ鳴し

昭和十四年度
寄託典籍
金庫贈書
幸堂私印

第二　妹背の節貞も流さぬる義拍の質
　　忠節の忠節は変用の用は早逝ひよ
　　逝捐をしゝ男子なのそきを忘れそ
　　俗もそなりぬ波よみし書物の蒙昧

第三　黒い言葉を被て出さい毅の精ふてひ也
　　井戸変の為にも武月者〳〵ぬ祈の耳み
　　魚毒の蝶も拾び〳〵者を捨て世界
　　祥國へ立戻つゝる国王の年礼

一　天上天下唯我独捐とせあ屋のまのがる
　　文が付てしは拍若ぬり酒て京都中喜賞色小仮名とる人の中沼大坂
　　ぬも出居を指甚冨考に書と男庚清屋の松を帝として長侍高ひと戻く
　　してくゝ代ぬも考く一を中上に上てさ考ぬ高ひと中の沸動をと中斗
　　何の不思ぬさ考の上考うも男と人ぬ上男と思ぬ色男つき思ぬ宮で神へ行くの
　　も考く淡今考ぬのをとはるれ物もをいまぐれの上ハ云紀ぬいつう紀の有紙き
　　るもうえそ学ぬ向ハ小学の時より考淡ぐよ和ぬ学考ぐ学考ぐ学考ぐ学考
　　を脩集めて左四史漢の舎淡ぬ秋を考と斗色ぐ学ぬ学の除拍帝とぬ学ぬ学
　　と折い考斗を考ぬ考ぬ考ぬ

[illegible]ど書後とかてうまもれく能書よほかて書しうしうやあまを書ゆく捕あうが
いそらよてと拝ばんとうひしゆ時川水を張るすみ水の社ぶ辯少て紙を所の姫も中
居も家れ持も居一板の高る迫を高せて魚を角使作ぬかりそるあも面ら帰ると
湯の番貝わうよくば迫の係く近代要中と出けて丈も一巻横ゆ幕お殿風呂
の沸年の高るまい沸家の蔵ゆうく大堀川の新設よ粥暮魚る云も赤ゆ足
かうぐ又沸給つまて山湯の新義さ入絵て迫あ巻撮法の敷山ハ赤ゆ迫てゆれ
もあまば敷山来りと連ふて赤ち毎ゆと二糸ち樹ゆう歩行ゆ迫糸山かく松ゆ磯の方
を拭て月年ゆ紅葉も一奥と例の矢歯仕出しに料理編ゆ火使作の中ゆ芳庵丁
と知業と仕出ぐを又一巻の浦ゆて知もう丁ゆ赤社の中ゆ仕出ゆ沸かく年と業ゆの
弥七巻の張い沸いひ三よ出てゆうとけよい婦ゆく速て年てと十月高年ハつぐく程の
陸ゆ尚ゆの義芸速山湯の表合魚で沸合て家でおしい座も又ゆけ義ゆの義も赤
中と方遠ひの出ゆりも赤ゆ面ゆく赤出しゆ歩ゆくの巻酒ゆ婦て彼弥七よハ及バ

ゆくけれよあるまくくて八月ゆ巻高巻高巻高

あしけれども足を太儀かして立あがり〳〵暴食足ハ一奥第〳〵行日と共に紅の雪
ひの右衛門風呂に添へて居さきゃよかまへて寒りかつてやり付こ一番ぐ粥
庫裏屋太郎の粥あんとんで紅あんが粥七てもを核七でも粥四本柄と柄まれば
めつこに負ける事でないとゝハ足ハさうづさが赤〳〵やく無西うゝ元出〳〵て
耳茶とゝて長沢てサア粥百と世さかけをめつてそう西牙ろあとろでるゝと安
あの耳へも遣ハゝ粥んさ奉い報加の天窓の上渇の庫くれよ又二番ゝと粥
粥くれ粥七ぐせさ切て富ゝ〳〵さよ傳さ紅ゝろゝと粥の小姫新獨る天
上てんぐゝのかゝで打ひし紅石異ひゝ〳〵やり赤やじみ小南さ二宝とゝ引こ
てうえのれ小雪す出きゝ〳〵ぐ奉も切粥七ぐ原仕出ひゝ〳〵ゝ西屋
家味もよゝ〳〵あくあつてだゝ〳〵く無西元汁付き胴百又紙よひん拾てお
庭とあしゝ〳〵ことれるの方へ投出で粥よ石系ゝ〳〵石異さこと紅ゝ〳〵
てのあゝの人ゝまゝど出ゝけて居ゝ門にで京〳〵傍ゝもあれ〳〵く高ゝ〳〵記

尻こだゝてゝし出今て足ハ〳〵くあすゝ石紅持拾紅粉出ゝ〳〵ゝ紅尻
あんゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

以ての外ぬ三年指つゞけて家ごと目の硬ぬふ一通も歌目通ぬ
かゝ出家ふ代の松坂あゝぬ松ケ濱うゝてア見弱方ふ寄りあと考やいな
やゝりくさん紙屋町さハ一ト立物屋と云ふ者ぬ
後ふそうぬ者ぬ大変例の通よ入て挽をあゝ一ト休よ性よおそハ生ぬ
さる者メそ紀国の中ふ拾ゞ年て離す女郎も俗よ脈をさ図てごふうこう
かゝいさんれゞ松ケ帝脈をみゝらてうんと海ぬ新材拾ふゞ屋ゞ工と貴
うけて同ふて月まゞ月ふの屋ゞ挽え彼嶽の妻やげと粉茶を抱て来て拍
ふいゞさゞゝと泣くふそゝ月ふとて来ふこゝふさゞおそハ生拍あゝん
ふゝふて紀国ぬ拾ふハ者ゞゞ女郎ハどふあゝ割げゞ来てそれゝ森もやゝ
どむゝやらそゝやゝで粉を脈ふ又ぬ三日の歌も図長陵ゞ病ひの拍ふく払
ケ帝改ゝゝ家ふくゝ外ふ幻ふさ屋の粉ゞ月ふ為て目を遊て病ふ寄りけ
ふ来ふそれとて脈さふゞ月内も者ゝゞ屋者のふをひゝてさあゝゞ医療よい

あゝ月ふあけふゞ月ふ山伏ふ入て病ふて月ふ足ハ生ふ月ふの西ふ
いふそふもちゝ佛方ふ行ふ者を粉ゞ脈ゞ月ふ七日の拍をも絵ふ月ふ
月ふあけふゞ月ふ者ふ月ふあゝ紙屋町ての家ふ人の妻ふ持ふ者を脈
者ふ生ふく病て月ふ月ふ山方ふ月ふ月ふ病ふ中ふ生ふ
一ふゝゝ者ふ月ふ粉れ月ふ月ふ通ふ私ゞ者ふ月ふ月ふ病ふ中ふ生ふ
ふて森ふ脈ふ月ふ月ふ者ふ中ふ月ふ月ふ者ふ月ふ月ふ月ふ月ふ
ら西方山伏ふ月ふ病ふ者ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ
て病て月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ
した病ふて月ふ角脈ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ
ら脈ふ月ふ今ふ拍ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ
月ふ合月ふの月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ
ふそふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ

あつく変ずるとて、ものの色ひあてまとまるあ
れば時日、出家やまとの西方浄土へ往生ひあてまとまるあ
私拙者仕り候へとて、伯母様、西方浄土へ往生ひあてまとまるあ
新参もとりくみて、ものうさうとみえ、ものの分別ひあて
ぬ物とおひあるさ、竜角ぞうけるに、こまとよく嬉しげ、なるまこバ
時、光りてそこに法華経中よりまを経よ法華経を持てこぐ〻ものと
せといさめ、重て猶々、出始経を一巻、内へ、嘆してくまぐ、なるまし
ろ紙を新地の茶湯の鍋上、時分の胡瓜、名かゝ重ね、重て紙の表、紙
てせがみ立仕て、麿さも、ものさよ、茶を持て、ものこ、ひあて
こ、後ひあてまとまるの、左も、茶、常、とこ、ひあて、拙者、とるか、れ、まとこ、ひあて
て、茶、祝ハ、小、後、戻、こ、の、一人、後、持、と、ひ、ものこ、彼、戻、ハ、病、まれ、ひ、て、茶
てあるの、後、ものこ、ものこ、ものこ

てそよあるべくごぞりませぬやうとそもあるべし方のわるの怪をとぶて上はてまう
まつたく怪もきうんよ出まつてまうすハ事のどくかりのあづかり者附とごぞれ
ハさ侯文奉まうせうとてもあるべき者附の添物でも付まうる侯ハ親方身まの出飛
でもて出方出業に手て納ものてもまうすれ申ぞうに出病事ハ行
侍もいとはせうは方ふるかりのわるかの事くてまうそれを原こうよ出侯と
はであろうと拉びまうすうとつて出吉あ侯しさ出ぞうあるべ且邪よ
添物ませはて納ものまうぞう侯ハ出行侍ぞうて下さまと
ませいうさあるのうさあるかつ中方ハ方ふるかりのまうぞ有侯でごぞりまうす侯ハ
出つとあるさまこのくうごぞりませうあるすこ姫ハ方のでけつく出行侍
よ者はて金源を流はしてごぞりまうすと追侯文りよて要よ庚侍屋へ進ま
つ汐くと拉侯まとハ和くたこ者ぞうべ山上の大こ義ぞうべ明日てもまうと添物を侯物
て侍てたりまと侯親程年の戒名でも侯て原こ出て添物を自義ハ来ておこせとあるまハ

こまま後病事行侍ぞうとあるべ山ハ出ぞうとはいせ侯ハ出ハ侯
侍有ものまうとあるべ高進よ紹を添へよあるべ山ハまうまうあるべ
侯の小者いこまうあるべ文記文ぞうお後ハ中ぞうとべあるまハ行
行いとはひまハ侯ぞうとべ邪魔ぞうべ内べ出ひ止べあいとのべや侯ハ金ぞ出ハ中
せいあるべ松ぞ神ぞう出業まうあるべ侍ぞうべ出ぞうて出吉よ侯せべ者ぞ
侍ぞうまうあるべ屋よ行方の妻まうまうて添物侍ぞうて出吉ぞうあるべ行出行侍者ぞうて下さう
ませいとや行ハ和まうまうまうべ出ぞうべ彼一紙屋まうあるべ出ぞうべ
出吉ぞうと行いまうて礼もいべ祝引者ぞうまうて行のやべまうまうべ出行侍のれ
てごぞう侯ぞ拉て侯て病べの康ぞうあるまうまうべて出ぞうべ出ぞうべ
て出行ぞうごぞりまうすべ行行ぞうべ出ぞうべ載ぞうべ出ぞうべ侯ぞ庚侍屋へ進へ
や者ぞ拉もいべ拉侯丸まうあるべ侯飯侯ぞうて出病者ぞう出行侍の出れで
ごぞりまうすべて天井雲ぞうべ出ぞうべ

よ〜やのいづくのきぐひ狩あるまで居ひもよう〜ゐ俳諧
とあり扨や〜若舎也」公雨しらふ紙屋友蓮居と云て老公是をあん〜法
じこ命く老公の長男よりおこつて秋田の鼻のあるじと若よ病み居るが
祈かて嗜悲んあるべく居るまゐ屋敷の遣ち〜出て遣ひ居ちを傳て居るか幼よ
見えて波江の生男あるべくいられ病ひと聞くあの方かめもちの品ひ出さ
どうしてもむすびひよ〜び都を紙生伝を持てゆそ扨ゐ持ちを撫し史彼江
きゐめて法然ゆて寅とゐそびへあるべくびゐ品ひ流ゆの行猪のと柴を成
を吸ゆや〜あんを俗接ゆ稀あまであべく居るきゐ郎て居が行猪
のれんとて老公の遣ひを推屋てあべゐ仕方を猪を仕方をとゐよ
松を帯むつく紀て居今考ゆ井を家ゆるまひ勝ち扨く考ゆるゆ居ゆく
いゆそゐ伸ゐ居張ゆ猪ゆ考ゆ彼岸のまゐを引むゐつて小掴ゆてべゐやく
寄く伸ゆ中ゐ居ゐをれゆ中の沙猪居ゐと品内の若居ゐ居てその月

よりゆ猪ゐ入寅を居て中ゐ猪ゆ居ゐ猪ゆ居ゐ猪ゆ居

一生もとろと笑ひ恋ふかゆたにみをやすけひし紀ひらぐ愛をとて爰ひとをくふ庭さに
の切アごとろより結ける名何のやどく寄くなるさ浦ろ人生ひ切ろ人と作よ新題
なるをおたろ命ごんの知何かるなどこ宮やの紀とてかつ法くひい小間ろりゆつてよう
けうこと大星桜の出病年時あが〳〵屋てくて毎日あるこの方で出容解出ろ紀ヤ上ひ年
ひ出間を垂ろ切日とそなく兵庫の紀風情出ろ知りも市間ろれば出親とやまず呂
法桜の明神桜と行よ〳〵て出根きを紀ひあり時はてござりはみするもの出つ紀色りはて
出桜のひと家は〳〵ろ〳〵ひ行ろ桜の年アの髪あくまを時はてとる寄桜出ひ八寄あ
はて出係年のろ出髪の出出命と取り年の出深切て考はてどやでお法ろ〳〵ありも
中紀みれのお紀をあこはさく紀はてとつくお庭さ紀入て世ひはて悪あが〳〵
宮あおり見少て立夢社ありはさまひ見の人中紀みれのお知ひあをあ桜〳〵さろ
ひ〳〵行桜はて縁ろ色紀て紀出見ひて立りは紀も呆〳〵ごろでるんで出ゆろやて紀
ゆもろさまよせ〳〵中紀宮紀ろ〳〵ろ〳〵ひて新ひよ千立年立

出で大屋ひ〳〵ろひ行桜よとって立ろく出蔵ろ中せこの立寄有持くふ寄ろとう
てあ立と寄姫〳〵流和桜く立て紀お寄汁姫寄〳〵出ゆやさを庭ゆ〳〵えハ立我立の
兵義ってを立つ〳〵て立て同屋寄〳〵釈迦のあ思ってか〳〵ひ中ゆ〳〵くろ人ふいろて
世ふ仲ろをい様ふもふさやどの義冬紀八石屋ひろ紀ひ年て立ひ外仕自傍で
何の用いるけまども大坂付屋桜〳〵堀のお紀ひろ早歩ろ寄てろ人ふいて石紀
場で行要を庭ひて十二人年新いとろんのて紀と見立接中と立ろ〳〵して自紀海と
上〳〵〳〵ろ立て立それるとかりての髪の子追服あるる小場と紀ひのハ持〳〵ごろんて山
形でいろ〳〵柴屋ふも立ゆ付ど〳〵紀と〳〵て立てあお寄り石紀姫ふ白漆と慶て立て冷
〳〵ろふ男色ひでもあく寄んの假ふも立ハ紀ふ分紀と費ヤて続ふハ親ゆも
見紀〳〵光紀武人女付ての迫立さを一紀さハ立る津の石竜の中に石の形と
桜出て柴て立見立ふ立て望三日一日歩紀て立石屋〳〵〳〵ひ姫ご生ひ分
て立紀歩ふのハ名人ゆて友立お立て生才子ふ立て立ふ立と寄て立紀

うち繁しい者ども、繁盛して近所のよい所も入り込まれよあるく打込む影町やおや
者通ひも彼此義坊と出かけて内かくれて内のうちよむしやくしやと者
の者聞とゝひとしと云事の者るおあんで脇を驚きてくれんどゝ世の中の
一日づゝけ塩屋の形ゝ仲とゝかけどゝて戈屋て出ゝ中ゝ浴室の塩ゝ仲
おーらくて出ゝうち婦の二人ゝの脇へごくゝ中ゝきひ果ゝと際ゝ中れる仲の彼
きゝの塩と指て塩町とあいてとゝあるいてとゝあるの解り拍二三ツ個出て掛家月いつ出ゝく
皆お喜て出ゝ彼の掛ゝ右ゝて彼ゝ右ゝも内人月限り足うゝさ月り妹掃もい
とゝた屋ゝ妹掃と者ゝ所お喜て出ゝて芸ひとゝゝゝが稽古納め年表れ
の紙面紙汁ゝ妹ゝ入てもかまいゝ家ゝゝあゝゝ妹掃ゝも及ぐゝゝども掃ゝいゝ
ゝ紙ひゝゝゝて皆ゝゝ出ゝ者ゝと抜ゝ下ゝ者のゝゝ出ゝゝとゝれゝて二階ゝゝ掃ゝて出
出ゝと和む者ゝゝいゝ皆ゝ扱ゝゝ者ゝゝ足ゝ出ゝかゝゝゝもゝゝゝゝ
いの小足ゝ出ゝ義ゝ者ゝ紙面ゝいゝゝゝゝゝ後ゝ者ゝゝゝゝゝゝ匠ゝ仕ゝ月ゝゝゝゝ

とゝて出ゝ夜ゝ変ゝて丹波ゝ仕ゝゝゝと云遅時ゝ者ゝ者ゝゝゝゝゝゝ

まゝ〜その日ぞ風呂へ出入をする時分ぞ
皆出掛くゝ小出入をして居る者ども
高麗の方ぞ皆ぞ出掛ぞ定八郎
者共のいと快へよりあて大方高麗
我が家まゝ我も義へ出ぞ出掛
絵られば者ハせぬもこまでよお升と
九の絵を来て絵絵たゝけて来よ
絵ゝ出ぞ来ぞ出掛て生田さ
よい男風呂へ入る仕さゝ仕さゝ
よ掘打ぞ出ぞ来ぞ出掛て
高麗と絵を来て絵へ遠へ入れば
絵での大笑と仕出屋の男ぞ
ぞ出ぞ来ぞ出掛ぞ
ぞ出ぞ来ぞ出掛ぞ
ぞ出ぞ来ぞ出掛ぞ

こで風呂て庶つさともいるれど仕さ絵
の男ぞあんまり者ぞ
又忘ぞ
初ぞ
孔雀楼中一の掛人足ぞ二三ヶ月ハ
ぞ者ハ孔ぞ
の時て有ぞ
絵ぞ有て絵ぞ
さんぞ
いよりみさしだんぞ
けられぞ
ぞ九ぞ

こうらくてはく移るやう殺ぬしてこうらくて冷みて月てさおどろもいへいの足と襲うう
風流てある新く〳〵夢ふぬそうるとこへ地と子民さおう翰蓋の上ふ桂うけ簾とこたた
立つりり投月いつうりハうく起てこうらく立て出かけて月てうあんといて寄うさ拾
であろうとそこめるとと清盗とれバハテ荒れさ本みこうしたんごじやけもこもち
つとハはともひあやだりもせひハ寝ぶぬうるといふ表ろろうりあるうこうち風う
でぬてうあるとこひとがはとでき寝うるこうる新うでハ似合ハぬどみうこうと
お絵とれば赤紙と青紙と絵を束ねての表三ハ巾とマア表さがよかとそれぶよか
ろふ色紙寝て本て寝迷ハ巾ハ出ぬうり〳〵絵て出てハ月てまどみ立て尻
をかゝけひ〳〵人合ふ寝れども彈ぶあるて尻ぶかゝけられぬとふハテ扱悔ふ表
ねて彈かねとふちぷこるふ。デモあいとハ表うるも面足もみ赤紙カイと
ふ赤紙と寝ふ絵と云もせるんぶさ立ハ表ハ月ハ表ハ月ハ表ハ月

のゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ明る年の夏少あてもゝ[illegible]ふ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
に対と解て見ますゝこれハ第八でふ[illegible]ゝて骨桶足ハ[illegible]んでこさりますゝで[illegible]と[illegible]
つゝりまゝすの[illegible]と[illegible]ゝて[illegible]ひかけゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ親父の骨を[illegible]年
[illegible]死[illegible]ゝて[illegible]ゝ十月の内ふ母者が内[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝの出合る母者ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

[illegible]とたくわかけらをたてるを[illegible]と中くすべ[illegible]
[illegible]へ引入んとて鮫の功[illegible]
[illegible]ど止す[illegible]
[illegible]より[illegible]毎日[illegible]くの[illegible]
方ぐ[illegible]
の中へ入[illegible]
とくいとほとて[illegible]
[illegible]
そして[illegible]
[illegible]
[illegible]

足ハ井ゑいあるさいご碎中の方ひごろ汲変でもく家ハいづれ三拍目かゝ仮
例の麻猿ゞゝ仮せ其ハ薬伝遠入分代のよい組せよ薬よ育砂種の桂罵抱もいづれ
よ幸以引速足を解とく〻畏ゝ拍出しゞ出ゝるゆとゝ八桂ハよ井ア
の中へゞゝさりのゝ方もよ放しゝ世ゝさく年行て井ア中かゝ世ての車五で
沼上ゝ砂種ゝ分て朱ゝ幸仮ゝも荒行ゝ色ゝ足ゝ幸の血路もゝゝ砂ゝの
味沼る時ゝ鈴ゝとゝ者絵ゝ〻ゝ除ゝゝハ汗ゝもゝ仮の中ゝらゝ〻井カツイリ
の和ゝの通足でゝまゝでゝ変えてもゝの桂足ゝ幸ゝて碎碓の一孫いゝが元
ゝ変てゝゝ世ての西月ゝゝゝ世ゝかゝ〻ゝ芸ゝて洗ゝ行の拍ゞゝゝりゝゝ世ゝいゞ
足ゝ水もゝく砂種ゝの井ア変ゝ引ゝりョフトウも井い組母有ゝゝ考ゝて言ゝの
ゝ十粉の焼ゝもゝるゝゞゝゝゝで碎中のゝひゞゝよゝ砂陳母ゝゝの実ゝゝゝ
言尻ゞ鈴ゝりいゝゝゝ仮分代のゝゝゝむく五紙ゝの洗ゝみの珊瑚爆ゝ毒と
仮て西内ゝゝゞゝゝ八ゝゝて西もゝ色ゝ実排仕分ゝ高いゝく九ゝゝくの

かけ合ゝ直ゝもやゝゝて裏仮ゝまゞゞ紙時ゝゝゝ拍分ゝ仕合ゝ世ゝゝ
紙ゝてゝく仮ゝ一年の幸抱ゝてゝ八ゝくゝゞゞゝの大三十日ゞ紙ゝゝゝと
ゝて三つの芯葉ゝゝ珠でゝゆゝゝ獅ゝの帆ゞゝ焼ゝ布ゞゝゞひゝ三月ゝ
三ゝ分父法利のゝま碎の変中小及ひゞゝ荘ゝゞ蝶ゝゝゝの変ゞゝてゝゝ
葉ゝ拍まり鈴の蝶ゝ中ゝゝゝ若ハゝゝゝと有ゝゞゝくの会ゝ別ゝ
ゝどゝゝかくゝき世ゝ中ゝ時ゝの鈴の言ゝ一有ゝの考ゝ実ゝまど
ゝで蝶の有鈴ゝゝゝ色ゝと神仏ゝ行て青色ゝと落ゝ歩ゝゝ第十変
の青色ゝ大ゝゝる鈴ゝ考ゝゝの方ゝ天変の有ゝゝを八色ゝゝくゝゝ
実ゝて考ゝ家衝ゝゝゝゝゞ一拍ゞ二ゞ分ゝ一ゞで実ゝて庭ゝの仮ゝと不潤法
ゝゝ料ゝゝゝゝゝ一変ハ青ゝどゝと考ゝの八ゝを八ゝこゝて仮ゝと考ゝゝ布ゞ三
八世ゝゝゝのゝと自分法利で実ゝて朱ゝて一人考ゝゝ変ゝゝ陰ゝゝ青ゝゞゝ
ゝゝゝゝゝ蝶ゝゝハ八ゝゝゝゝぬゝゝゝゝゝゝゝ分ゝて三拍目ゝゝ蝶ゝ世ゝ潤色て

のてい

やりかけて見てさんざんに減ず利てやる〳〵後あの酒ふも吉ぐりまてお度笑へ代れ
ちら〳〵するありてこころを掛翌日をかうゝどやじや多分悪の所の戸が明めて
安程やりふこゞ明て見まこゞ苦の後よ来てゐる〳〵めてそうあと呼るかけて出く
つこ鬼の者ゴウく業ゞまゞ満め死中く死さけ紀いあけまても見ハ笑そこゞ
自る〳〵死ごとゞひとを固て近ものくと紀接抄コレハく助菁蔵紀いつのるに家
らゝりこと紀へごゞろこゞとて来れの伍肉後ハ涙よ紀こゝろ〳〵の拭るやもめと遠よ
かる〳〵ゞゞ中色こ中ゞやとのまゞを多て泣くやゝまゞこれいゝたゞ蓑落紀
扱くゞゞの見ゝ多の辻で来ひもさゞ皆〳〵紀て指やつまやゞ来れ在も拭とまゝ紀
とそ紀が減ゞよの扱乐〳〵乐ゞ多ゞ〳〵白い帷ゞでも来ゞりのゞやゞそまゞふゞんゞや
ちが助ハ小級でも亂色ゞやゞ七ゞ多ゞ紀ハき紀義ゞハ何ゞでたゞて婆婆ハ正
月あゞで有ゞこゞ扱乐もやつゞり門の蓮の家でも来ゞす紀ゞ紀て泣ゞ多ゞ来ゞ
ふゞやゞゝよ近ゞで多ゞて見ゞて下ゞさゞまゞいゞこの杖ゞゞゞゞも宿来ゞの勝死ゞゞのゞひし

出ゞてゞの多ゞひゞこ近ゞの虎肝ゞと浸ゞゝてコレく多ゞ多ゞ来れソレハ何ゞといハゞゞゞりゞゞゞゞハ
扱乐でゞゞごゞろゞゞのゞやゞゞとゞゞくゞゞ多ゞ来ゞ三ゞそゞまゞゞゞゞ地獄ゞ〳〵ゞ紀ゞ紀ゞ紀ゞゞゞゞゞゞ
扱ゞゞゞゞと見ハゞゞゞゞ送ゞゞゞのゞであゞゞ紀ゞゞゞゞゞゞ

てゆけりに着の袂屋の陀服とて田舎めせれの医者方流切よりしやどしてゐるゝ
やうて近在で用ひて衛者さけ内用はなく戸を閉くと言伝るに流るゝ
よ用かゝだなりやるゆれどもあ事に紙表ともつられもでゞ明てゝ入てはくゞり用ゐ
さといとさとごはに流変て医もあけもバ陀服つゆゝ入意角表ゞ抜ゞでこゞ
ゆ行よきゆくと共ちやりまたるあさがゝんまゝすもゞ吸抜桃や使利酒冷ゆゝ
あと形りであるハ出ぢう乗まゝ出ますとゝんを酒ととのとゝられく係よ出ゝ
出ゝと死ゝと教ゝとゝての男法乗ことゝあてゝさる面月あさ有られ外ゝく
あさゝすとタアかゝの出よ陀服ゝあくきのどゞさ塩て抜くそまハしゝのあゞゝも
変ゝあれ有条りゝコあさてハ元日年ゞかハゝたゝさ抜でるゞゞ抜のあさの
ゝあくあゝくバおくいどゝあゝと水まする行よ死る元ハ止さるありませとて表ゝあ
てかんさい絵の紙今ゝ出ておくの貞とてゞあもあれとゆ出でるゝ影ていたの世ハ汚
ませあ行よ流ゝよ医て元日るあ食れも歩汚て行ひ出さるありはそあさひ

紙よあてゝれさよハ砂糖汚ゝよゝ利まゝとりのこるれハりと砂糖あのあ食と
あゝしてこゝとゝよゝを砂糖あの流ゝゝ出さ食ゝたゝと様を入てるれのとゝて
こゝあれよ紙があさる器ハあいそ多ゝ升紙ゝと上汚も砕行のんで表入てハ中く
紙の蜂も来むいて出れゆてねきする器法もあゝりんあゝのゝ出ゝと表度
あゝつてかゝ行ひ亜ゝゝりゝ出ゝて表陀よ表ゝんしてゝ場ゝ生けの流て
行くゝ出ゝ陀服のいりゝ色の世ゝとくゝゝゝゝ入ゝ出ゝとのでゝるハさり
とハ陀服ハ紙ゝハ切ゝ人じやゝて世ゝあさふる紙裁て係よゝ表ゝ入ゝ家ゝと付ゝ
ゝて年の表の表す汚抱ゝ挿ゝて紙表の流て抜ゝとゝゆゝ小板表二ゝ写ゝて来
て立ゝゝゝで情沸ゝ行で大三十日ハ医ゝがゝゝ元朝の礼ハ勧めいと陀服の勧めどゝ
出てゝと不自由ゆゆかゝゝゝひ対て偽の紙一枚写て来て正表のゝあゝとゝ附ゝかゝ表
の行での紙一枚とみくゝ上ゝ出医ゝての行く周の年礼抱ゝ表の立ゝかゝ飯の社礼

巻之三終

通四 本千

河市

契情雪解女

令五冊

附

仕平小書記 ―寛中上巳朱丑二月ゞ奉出しまい

色と恋とふ深分の侠達小袖女乃身ふ甲斐く敷
深月のゆ夏い身徒乃約ゞかゞゞい宝と角力の立引
さつぱりとしゝと無拍子

宮尾の紅葉
京堀地の萩

英

信し深とふ咲分の萩ゝ紅葉いいつくとてもあ愛のちゝ
法合の百法京古ゝゝ一ふ五百里俗い宝と清水の出入
いろとりとした契情質